無題

トラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無題

【Ｎコード】
Ｎ０３２７ＢＡ

【作者名】
トラ

【あらすじ】
特になし。ただの息抜き小説（，・ω・、）

プロローグ

「〜♪」

軽快な足取りで少年はとある場所へと向かっていた。

少年の名前は笠外龍騎、クセの強い天然パーマ特徴的で中性的な顔立ちをしている。

少年は唐突に足を止め、目の前の扉を一瞥した後、手を胸に当て、静かに呼吸を整える。

よしっと聞こえるか聞こえないかぐらいの声量で言い放ち、扉を開けた。

その空間は何もなかった。

部屋は目が痛くなるほど真っ白で、まるで自身が浮いてるかのように錯覚させる。

少年はその空間に少し面を食らっていたが、直ぐに立ち直って、部屋の中央へと向かう。

そこにはそれまた白い台があった。中央に丁度てが入れられるほどの穴が開いている。

少年は迷うことなくその穴に手を入れた。

少し痛みが走ったようで、少年の顔は歪んでゆく。

やがて苦悶の表情から、普段のお気楽な表情へと戻り、手を抜こうとする。

その手にある確かな重厚感に胸を躍らせながら。

「武器（パートナー）を認証完了、適正確認……ｏｋ　武器の生成……ｏｋ　決まりました、武器名称は……」

「ユニークランクの武器、モロバノツルギ　特性　呪われている、武器使用時、生命の有るものに与えるダメージと等価のダメージを受ける。　威力増幅　第二段階移行……未明」

「……はい？」

少年は素っ頓狂な声をあげ、手にある武器を見た。

そこには全ての苦痛を再現したかのような禍々しい装飾がなされ、剣身に黒い靄が掛かっている――

呪われた武器があった。

「……えええええぇぇぇぇーー！」

少年はなんの抵抗もなく、そのまま今の心情を叫び声で吐きだした。

それは具現武器と言われ、生涯のパートナーとなる己の剣でありそして化身である。

そのなかで一人の少年、龍騎は呪われた武器を手にした。

これはそんな何ともいたたまれない少年の物語（ストーリー）。

第一話（前書き）

いちいち本文が短いという罠

第一話

「ええ？　ちょ、ええ？」

少年は困惑を隠さずには居られなかった。

この学園では具現武器というあらたな能力を育てる為に作られ、その具現武器を用いて実際に訓練をする。

といっても勉学を主としているので、実技以外はいたって普通だ。

そして、その武器はランク分けがなされている。

その武器自体は武器認証、つまりはあの白い空間でその個人の素質を読み取り、適した武器が与えられる。

ランクは　ポアー　ノーマル　レア　マスター　レジェント　とあって、その枠外に位置するたった一つしかない武器、ユニークランク。

そのユニークランクである武器が自分の適正だったのだ。

それ自体は喜ばしい事なのだが、少年は別の所で困惑していた。

「お……お……」

少年は手元にある禍々しい剣を見て、のどにつっかえている気持ちを、

「俺は自虐趣味なんてモンはないんだぁーーーー！」

真っ白い空間で、吐きだした。

◆◆◆

向かい側の扉から一人の少年が出てきた。

その少年はなぜかげっそりしており、辺りに負のオーラをまき散らしている。

具現武器は収納が可能で、いつでも取り出せる反面、それを用いて問題など起こそうモノならキツイお灸が据えられる。

少年は現在武器を収納しているが、その負のオーラで回りの人間は少し引いていたのだが、少年は気がつかなかった。

少年は辺りを見渡すと、たくさんの人が自分の武器を紹介したり、雑談をしている。

所々外れている人もいるようだ、それは龍騎とほぼ同じ境遇の者達だ。

話の話に完全に入れない、これは龍騎にとって苦痛以外の何者でもなかった。

とりあえず座るところはないかな、と椅子のようなものを探して

いると、遠くから歓声が聞こえてくる。

耳を澄ますと、そこには金髪の少年がいた。

少年は手元の武器を少し上に掲げながら、なにか演説じみた事をしている。

「うわぁ……すごい、マスタークラスだってさ」

「いいよなー俺なんかノーマルクラスだし」

「いやそれが普通だって」

そんな話し声が所々から聞こえてくる、龍騎は見に行ってみるかな、と呟いて、金髪の取り巻きへと紛れた。

「フフフ、驚いたか！　これがマスタークラス具現武器である……っと、自分の武器名称を伝えるのは相手に自分にとって不利になる情報を与えるだけだから押さえておくが……」

などとたいそうなドヤ顔で演説じみたことをしている金髪、武器名称なら実技の時ばれるだろうに、と呟く龍騎。

ここにいてもしょうがないな、と言った様子で踵を返し、元々いた仲間はずれの場所に戻ろうとしたのだが。

何とも、そう言った行動は金髪にとっては許し難い行動のようだった。

「貴様！　この俺の有り難き言葉の途中にどこに行こうとしてい

る？」

まるで言葉が詰まったが、良い話題が見つかったかのような顔をしながらこちらを向いてそんな事を言ってのける金髪。

確かに、言葉が詰まって四苦八苦しているのは見ていた龍騎だが、なんで俺なのだろうか、と今日の2度目の理不尽に嘆いていた。

龍騎は首だけをその金髪に向ける、すると金髪はなぜか身体を震わせていた。

「え？　なに？　どした？」

「上等だ貴様……我が具現武器である輝石の剣で打ちのめしてくれる！」

しばらくの沈黙、だが、その言葉を真っ先に理解した少年は本日2度目の叫び声を上げた。

「どうしてこうなったーーーーー？！　というかお前武器名称あっさり言ってるし！」

「う、五月蠅い！　ともかく決闘だ！」

その様子に呆れる取り巻き、呆然としている取り巻き、別の話題に移った取り巻き、そんな様子をみて龍騎はすがるような視線を向ける。

その返答は全て同じ、《お気の毒に》だった。

「い、いや、ちょっと！　なんで皆無視？！　というかそんな気の毒そうな視線をこっちに向けないでくれ！」

「はいーちょっと良いかー」

と、一人の教師らしき人物が出てくる。

どうやら全員の武器認証が終了したようで、教師らしき人物が待機している生徒を呼びに来たようだ。

「お前達……入学そうそう……まぁいい、それはともかく全員武器認証は済んだな？　では私に着いてこい」

その教師はいかにも面倒臭そうな表情で、かつ、金髪を窘めるかのような表情で龍騎達に言い放ち、どこかに歩いて行く。

金髪はいかにも不満げだが、仕方なく、といった表情でその教師について行く。

龍騎は少し呆然として、そこから立ち直ると、髪を一通りかきむしってからそれに続いた。

「ではまず私から、私の名前は深川、まぁ下の名前はいい、と言うか名前は覚えなくても良い」

そんな様子で、記念すべき第一回のＨＲが始まる。

名前を覚えなくても良いなどという教師は初めてなので、クラスの生徒はしばし呆然としていた。

「ふむ……ま、所でだ」

とそんな空気を断ち切るかのように、彼女は声を発する。

「とりあえず個人の技量を確かめる……っっていう名目だが、まぁ要するに教員達にボコられてこいっていう恒例の……」「ちょっとまったっぁあぁぁ！」

とりあえず龍騎はなにやら物騒な事が聞こえたので無理矢理中断させる。

その様子にクラスメイト全員の顔がこちらに向く、無論、金髪もだが、なぜかその顔はにやついていた。

「どうした？　あー……笹外？」

と、深川はクラス名簿のような紙に目を通してから返答する。

「いやいやいや、まだろくに経験も積んでない私達が先生達にって、理不尽過ぎじゃあないんでしょうか？！」

龍騎の発する言葉にクラスメイト一同が賛同しているようだった。

一人を除いて。

「ほう……貴様、俺がまともに経験を積んでないだと？　笑わせ

てくれる、この俺は生半可な修行はしていない、ましてやこの学校の教師共なぞに遅れをとるわけがないだろう！」

「ちょ・・・おま」「ハハハッ！　良いじゃないか、その意気だ、んじゃあ少数意見の尊重と言うことで、とっとと訓練場に向かうぞ」

龍騎は敵を見るようなめで金髪を見るが、以外にも金髪の目線はこちらに向いていなかった。

「ところで、深川教員、この俺とそこやつとの決闘というのはどうだ？」

「おいおいおい！　まてって！　多数決制度はないの？！　というか何勝手に話すすめてるんだ金髪！」

「俺の名前は金髪などではない！」

「あーもーうるさい、行くと言ったら行くぞ、諦めろ、それと個人の決闘なら後にしろ」

そんな状況に少し突かれた様子で仲裁にはいる深川に龍騎は多少つっかかりはしたが、直ぐに諦めた。

それを確認した深川は、金髪の方を一瞥し、クラスメイトの方に目をやる。

「と、言うわけで、お前達異存はないな？」

と、反対は認めないと言った様子で問いかける。

それに刃向かえる者はこのクラス内には存在しなかった。

「まぁ元々伝統行事ではあるし、しょうがないんだ、私もできればやりたくないんだが……」

と、頭と腰に手を当てて溜息をついた深川。

その言葉に反応したのは誰もいなかった。

「それでは、今から約5分程度で指定された場所へ向かうように、あー……第一演習場……あぁー忘れた、適当にそこら辺の教員とかに聞いてくれ　んじゃ」

「「「「あんたも教師だろうが！」」」」

なんとも適当な事を行って教室を出ようとする深川に対して、初めてクラス全員の心が一致した瞬間だった。

◆◆◆

一言で表すならば、そこは圧倒的な空間だった。

第一演習場ではなく、第五演習場だが、その中心に円形の舞台があり、その回りはなにか透明なものでドーム状に覆われていた。

その他様々なトレーニング機材や、なにか意味の分からないものまで、様々な者が置いてあった。

今は誰一人としていない第五演習場だが、使い込まれた竹刀のような物やトレーニング機材が、なにか威圧感をはなっており、龍騎がその空間に入ることを一瞬ためらったほどだった。

そして今、肝心の担任である深川を待っていたのだが、一向に来る気配が無く、もうすぐ１０分が経過しようとしていた。

自然と、回りの人間の口が緩み出す、所々で今後の抱負のような事を話し合っている。

「はぁー」

龍騎はというと、自然に口が緩んで溜息が漏れ出した。

今日起きた出来事は龍騎にとって多大な精神的疲労を伴う物だった。

ブン……と、どこからかかすれた音が聞こえてくる。

その方向に首を向けると、クラスメイトの一人が具現武器を出したようで、それにつずいて、他の生徒も具現武器を出そうとしている。

その時、龍騎は頭に電流が流れたかの如く衝撃を感じた。

龍騎の武器はまれに見るユニークランク、しかもそのランクではさらに希な呪いを付加された装備。

要するに出したら非常にまずい、という状況なのである。

今更そんな事に気がついた龍騎は焦る。別にばれてもかまわないのだが、武器の効果が知られれば、バカにされるかもしれないという気持ちがあったからだ。

元々具現武器は本人の性格、深層心理、様々なものから、適合する武器が選出される、武器を出現させる方法はいわゆる召喚のようなもので、だれも干渉する事が不可能、故にこのことがばれれば、龍騎は自虐趣味の変態の烙印が押されかねないのだ。

どうする、どうする、とブツブツ言っている間に少し前に聞いたやる気のない言葉が聞こえて来た。

「おーいお前等、先生方連れてきたから、とっとと演習はじめんぞー」

そこには深川と、この学校の教師らしき人たち数人があるいてこちらに向かって来ていた。

その声やる気のない声は、龍騎にとっては処刑宣告のようなものだった。

とりあえず何もしないままだと、☆ＨＥＮＴＡＩ☆　の烙印が押されかねないので、咄嗟に思いついた嘘でこの場を逃れようとする。

「先生、少しお腹が痛いので今回の演習やすませてもらっていいですか？」

（アホか俺は！　んなの嘘にしか聞こえないだろうが！　お腹痛いから～っていうのは死亡フラグだバカヤロー！）

満面の笑みで、ただ冷や汗をダラダラ流しながらそれを言う。

深川と龍騎の間に何とも言えない沈黙が流れる、何か他に無いか考え、龍騎がそれを言おうとしたところ、それは深川の声によって遮られた。

「ん……ああ、いいぞ」

「うぇ？」

なんとも素っ頓狂な声をあげた龍騎は咄嗟に口を閉じて、逸らしていた目線を深川に向ける。

すると深川は意味ありげな視線を向けてきて、資料のような物にこっそり指を差していた。

その指さす所には龍騎自身の個人情報と、武器名称についてが描かれていた。

顔をあげてもう一度深川に視線を向けると、深川はいけ、と小声で耳打ちした。

思わず泣きそうになったが、少し会釈をして、走って第五演習場を出て行く龍騎。

それを深川は優しそうな笑みを浮かべて見ていた。

――表面上は。

「んじゃあみんな、笹外が抜けてしまって演習予定に若干変更が出るが、今日の演習はするぞ、……ああ、笹外を抜けさせたのは私だ、もし時間内に帰ってこずにそこらでブラブラしていたなんて事にはなりかねないから、私はそこで笹外の帰りを待つことにする。よって私は監視役であって演習に参加が出来ない、あー残念だな」

そう言って深川はふぅ、と息を吐く。

クラスメイトは深川いきなりの長々しい発言に呆然としていたが、その様子を見た深川は黒い笑みを浮かべていた。

後ろの教師たちは溜息をついていたが、そんな様をもろともせず、深川は口笛を吹きながら扉へと向かっていった。

第二話

見事演習から脱出した龍騎は、演習の様子を確認するため第五演習場の窓から生徒達の演習の様子が見れる場所へと移動していた。

といっても龍騎自身この学校の構造は全くと言っても良いほど知らないので、とりあえずうろうろしていると大分時間が掛かったのかもう既に演習は始まっていた。

そこに深川の姿が見えなかったことに若干の疑問を感じた龍騎だったが、すぐに演習の光景をみてその思考を払拭する。

なぜなら生徒達が一人一人、まるで処刑場に連れて行かれる羊のように演習場中央の円形舞台に連れて行かれ、一方的な攻撃をうけ、全ての生徒が例外なくやられていた。

思わず身震いする龍騎だったが、次に連れて行かれた生徒の戦いぶりをみて目を見張る。

その生徒は他でもない金髪だった。

いままでの生徒と同じように対処する厳つい教員だったが、その第一打撃は見事に金髪にいなされる。

そのことに少し目をみはった教員だったが、すぐに思考を切り替えたのか、落ち着き払って距離をとる。

心なしか、他の生徒も固唾をのんでその光景に見入ってるかのようだった。

次に動いたのは金髪、といってもじりじりと牽制しながら近寄るだけだが、徐々に教員の顔つきも本気の物になっていくところをみると、なかなかうまい立ち回りなのだろうか。

不意に動きを止めた金髪は一気に距離を詰める。

なぎ払うように放たれる剣を、教員は落ち着き払ってバックステップやサイドステップなので避ける。

金髪も埒があかないと思ったのか、すこし顔を顰めて距離をとる。

離れてみる分には余り分からないのだが、その状況は緊迫していると龍騎にはわかった。

そしてなにかボソボソと呟いた金髪、それに反応したのは教員で、なぜかその顔は笑っていた。

すると金髪は突然憤慨し、そのまま教員に突っ込むように攻撃する。

が、その直線的な攻撃は見切られてしまい、サイドステップで躱した後、教員の訓練用の木刀で具現武器をはじかれ、無防備となった鳩尾に容赦なく拳が入れられる。

金髪はあからさまに苦悶の表情を浮かべており、反撃する気はないのかその場に崩れ落ちた。

すると先ほどまでの緊張感は無くなっており、また同じように次の生徒が連れて行かれる。

演習に参加している訳では無いのに疲れてしまった龍騎はふぅ、と息を吐いた。

金髪の事はあまり強くはないんじゃないかと思っていた龍騎だが、いくら得物が違いとは言え教員相手に奮闘したことは龍騎が金髪に対する認識を改めるのに十分だった。

そして演習が終わったようでこの部屋にいる意味もないと思った龍騎はここから出ようと後ろを振り返り、扉へと歩みを進める……が。

それは足から伝わる感覚で中断されてしまった。

――ムニュ

「あ……？　え？　むにゅ？」

いきなりの事に変な声を上げてしまった龍騎は恐る恐る視線を下に下ろす。

しかしその直後龍騎は意味不明すぎることに頭がついて行けず、動けなくなってしまった。

そこには何故か管理区画外（そと）の生物、ゼリー状の魔生物がいたからである。

しかも、踏みつけた形で。

「……」

「……ムキュ」

「……」

「キュウ……」

「……ッえええええええええぇっぇえええ！」

押さえられない叫びが漏れ出した。

今現在頭の上に乗っかっているゼリー状の魔生物は何とも機嫌が良さそうにぷるぷると振動していた。

そしてその頭に乗っかられている龍騎は今後のこのゼリーの対処について言い渡されたことに溜息を吐いた。

端から見ると異様な、というかどう見ても異様なこの光景に、回りの反応は三者三様だった。

中には触らせてくれといったチャレンジャーもいたが、勿論龍騎は断った。

下手に触らせてなにか起きたら嫌だったからである。

あのあと龍騎は職員室に報告しにいき、これを外に追い払って下さい、と懇願してみたのだが、責任を持って面倒をみろ、と溜息をはかれてしまった。

なにせ頭から離れないのである、これでは教員も始末に負えないようで、とりあえず害はなさそうだから、との理由で管理を龍騎に押しつけたのである。

まるでそこが自分の居場所だと言わんばかりに自分の頭を占拠しているゼリーに対して、龍騎はとても悩んでいた。

――どうやって頭洗うんだよ……と。

やはり異様な環境に導かれる者は少し考え方がずれているのだった。

「ふむ、間抜けな貴様にはそれがお似合いだな？」

すると金髪が少しバカにしたような笑いを浮かべて絡んでくる。

「……うるせー」

「ふん、しかし魔生物が人になつくとはな……まぁ最弱のスライム種ならあり得る話なのか……フッ、何にせよその姿はお似合いだ」

非常にむかつく言い回しをされた龍騎、そのままスルーして教室へと向かおうとした、が。

「ああ、そうそう、鳩尾大丈夫か？　凄く痛がってたけど」

と笑いを吹くんで吐き捨てていくことにした。

その言葉を投げかけられた時、金髪の顔はしばし呆然としており、やがて少しずつ紅く染まっていった。

「なぜ貴様がそのことを……！　っそういえばあの時っ！」

「えーと？　たしか、ここの教員に遅れを取るわけがない、っだっけ？　まぁいいや、バイバーイ」

「貴様ァァアアァァ！」

と、何とも子供の悪戯レベルの会話をしたあと、気分が晴れた龍騎は上機嫌でゼリー……もといスライムと共に教室へと向かうのだった。

◆◆◆

「あ、そうだ」

龍騎は寮内で呟いた。

今日の学校生活は非常に新鮮なもので、龍騎のテンションを可笑しくさせるのには十分だったのか、夜中にも過ぎず龍騎はあることを思いついたようだ。

「お前そういえば名前決めてないよな」

するとそれに反応するかのように頭の上でぷるぷると揺れるスライム。

頭から伝わってくる感触を確認した後、物思いに耽る。

「そう言えばいろいろあったなぁ……クラスメイト達には色々言われたし、風呂でお湯だしたら急に弱ったし……」

「キュ」

「あ、じゃなくて、名前だな名前、そうだなぁ……俺ネーミングセンス皆無って言われた事があるから自身がないんだがなぁ……」

その言葉の意味を察したのか、スライムはわずかにピクッっと反応したが、考えに没頭する龍騎は気づかなかった。

「……よし、スライムだから、スライm……ってデデデデデ！わかった引っ張るな！　わかったから！」

と涙目になりながら訴える龍騎、あおれに対して頭に乗っかっているスライムは髪を引っ張るのをやめる。

「んー……あー、おー、うー」

「……キュウ」

「キュウ……、いや、なんでもない」

なにか嫌な予感がした龍騎はそくざに引っ込み、また考えに没頭する。

「……そうだ！　キイラってのはどうだ！？」

「……キュウ」

否定しないところをみて肯定と受け取った龍騎は、自分の頭に乗っかっているスライムに向けて命名した。

「よし！　お前の名前はキイラだ！」

「キュキュ～」

まぁ妥協してやるよ、とでも言い足そうなキイラに若干落ち込んだ様子だったが、名前が決まったことから一気に何もする事が無くなり、やがて睡魔に襲われ、すっかり寝入ってしまう龍騎だった。

第二話（後書き）

スライムさん名前決定（笑

キーになる人物？　ですから悩みました……。ネーミングセンスェ

……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0327ba/

無題

2012年1月2日00時51分発行